

岡 晋 （日本学術振興会 特別研究員・国立民族学博物館 外来研究員）

1. はじめに

中国雲南省の西北部から四川省、チベット自治区にかけての地域で、独特な文化を培ってきたナシ族の社会について、その柔軟性をふたつの点から紹介する

- ・ナシ族の概況
- ・ナシ族の名称
- ・民族識別工作
- ・ナシ族の知名度
- ・本発表の内容

新たなナシ族イメージの提供

社会環境や政治状況の変化に素早くかつ柔軟に対応するナシ族（の社会）の姿

- ①つねに政治体制側で活躍する強かさ
- ②雑多なモノを取り込む柔軟な社会構造

2. つねに政治体制側で活躍する強かさ

- ・中国皇帝との関係

後に元王朝を建てるフビライが雲南の大理国に進攻した際、麗江の勢力がいち早く恭順を示し、大理陥落を導いたとされる

この功績により、麗江一帯の統治を任されたとされるのが、後の麗江王の祖先

明代以降、麗江には土司が置かれ、その職には、麗江の支配者である木氏（麗江王）が就いた

土司とは中国皇帝が西南部の非漢族地域を間接統治するために地元の権力者に与えた官位。「土」は地元出身を意味する

皇帝への朝貢と辺疆有事の際の軍隊派遣などさまざまな義務が課せられていた

地元では絶対的な権力を掌握した「王」

木土司は「木天王」「麗江王」と呼ばれ、怖れられた

- ・麗江王の全貌

明代中頃から麗江周辺地域を平定

皇帝の要請により、しばしばビルマ方面など、各地へ軍隊を派遣

詩文の才に優れ、西南地域屈指の中華的教養をもつ人物

チベット仏教（カギユ派）の保護者でもあった

政治的な先見性に優れ、中華とチベットの両者をにらみつつ、つねに体制側に続けた

- ・中央政府との結びつき

麗江王が中華的知識人を麗江に住ます

1723 年から科挙（国家公務員）制度の導入

最終試験合格者 7名

郷試験合格者 60名以上

1950 年代の民族識別工作では、雲南西北部の民族調査に麗江のナシ族が深く関与

・欧米列強との関係

*チベット宣教時の通訳・道案内

1852 年、カトリックの宣教師が雲南経由でチベットへと向かう際、通訳として活躍

*宣明徳

1930 年、中緬国境調査の役人に、「自分はチベット人」と称して、チベット地域への道案内役を売りこむ結果は不採用

数年後、ジョセフ・ロックの通訳兼ガイドの職を得る

チベット語と漢語に通じているナシ族は、ガイドとして最適

・強かな「トンバ」

欧米人の付き人に、トンバが多かった。

トンバ。ナシ族伝統の宗教的職能者

宗教儀式や村人の相談などに対応

熟練した技術と膨大な記憶力を必要とする

多くのトンバが、ジョセフ・ロックの付き人に

トンバは研究者を宣伝屋として利用

1940 年代、各地のトンバが研究者を巻き込んで、自らの宗教的権威を主張し合う

・小結

3. 雑多なモノを取り込む柔軟な社会構造

・父系制・母系制から「家」へ

ナシ族の解説で、「父系制」「母系制」という用語がよく使われる

個人の親族組織への加入資格や、相続の権利と義務が、父母のどちらを通じて規定されるか

（父＝父系制、母＝母系制）

ナシ族の社会は例外が多いので、「父系」「母系」よりも、「家」という概念が鍵になる

※以下、金沙江流域の「ナシ族」を事例とする

・「家」を核とした社会構造

個人はいずれかの家屋に生活基盤を置く

ひとつ家屋で生活する家族（世帯）が「家」

「家」の歴史（人物、出来事）や地理（景観、立地）に基づく名称と呼ばれる

家の継承に際して、決まった序列はない

一般的に、先に結婚した兄弟姉妹が実家に残ると、その後に結婚する兄弟は「分家」する

「家」は、各世代一組の夫婦からなる

・「家」の祖先祭祀

「家」では、毎日3回、祖先祭祀が行われる

このとき、最近の死者3代までが祀られる

死者3代(祖先)の呼称は、「〇〇お祖父さん」「〇〇お祖母さん」
一般的には、3代×2親=6柱の「御先祖様」となり、古い順に名前が唱えられる
「御先祖様」同士の続柄は不明瞭
つまり、父方か母方かの確証はない

・「家」の断絶と永続性

「家」に子がいない場合、養子女を取る
養子が得られない場合、断絶することも
しかし、断絶後も「家」は存続し、土地は残る
つまり、「家」は公の存在で、個人を越えた永続性をもっている
ある「家」の分家が、断絶した家の土地を引き継ぐことがある
その際、断絶した家の「御先祖様」も引き継ぐ

・「家」と「かつての兄弟」の機能

分家は、世代を重ねると家同士の関係が不明瞭になる
「かつての兄弟」としての記憶がある限り、冠婚葬祭時に「兄弟」として当事者に代わって客人の世話をする
「かつての兄弟」としての「家」同士の繋がりに生物学的な根拠はない
姓が違うことはしばしば
しかし、所属する「祭祀集団」は変わらない

・「祭祀集団」と祖先祭祀

「家」は村内の特定の「祭祀集団」に帰属する
村には複数の「祭祀集団」があり、同じ名称の「祭祀集団」が、広い地域に分散することも異なる地域間での連繋はない
「祭祀集団」でも、祖先祭祀が行われる
この祖先祭祀では、「祭祀集団」の始祖が祀られる

・「家」と「祭祀集団」の祖先の違い

ふたつの祖先祭祀は、「御先祖様」の性格が異なる
「家」・・・最も近い死者数代を祀る
「祭祀集団」・・・最も遠い死者数代を祀る
中間の死者についてはいっさい語られない
結果として、外から移住してきた人びとを取り込む機能を果たしている

・変化に対する柔軟性

村内に、「かつては〇〇族」の「家」が存在
人の移動が多いこの地域では、移住は珍しくない
しかし、「家」は代を重ねてしまい、どの「御先祖様」が「〇〇族」だったかは分からない
しかも、どこで断絶し、復興したかも分からない
逆に、「かつての兄弟」の「家」とともに、村の「祭祀集団」に組み込まれている
気が付くと「かつての〇〇族」も「家」の特徴を物語るだけになり、「ナシ族」へと組みかえられている

・小結